

ピョンヤンは宣言する

(第6回)

第3章

1

広く開け放たれた窓から、まぶしい陽光とともに庭園のさわやかな樹木の香りや涼しい川風が流れこんで、室内はいつになく明るく新鮮だった。眠りを知らない夜の思索の世界に深く浸っていた家具も、疲れをいやして生気にあふれているように艶やかだった。

キムジョンイル総書記は、手を後ろで組んで地球儀の前に立ち、ラテンアメリカとヨーロッパをながめ、それらの国の地勢学的位置と政治情勢について考えた。ニカラグア……ソ連指導部の背信によって武器援助が中止され、厳しい試練をへているサンディニスタたち、アメリカ帝国主義の経済封鎖にひるまずたえぬいて、あらゆる誹ひ謗ぼう中傷と挑発にうちかっているキューバの共産主義者たち……。

突然、電話のベルが鳴った。1回、2回……キムジョンイル総書記は電話にゆっくりと近づいた。

交換手が道党責任書記のパクユンシクからだと告げた。

「指導者同志、おはようございます。道党責任書記のパクユンシクです」

「ほかでもありませんが、リグンウトナムが新しい妻を迎えてからどんな様子ですか？」

「指導者同志、あまりご心配なさらさないでください。彼は気持ちも新たに、熱意をもって生産の指揮をとっています」

「そうですか？ よかった！」

キムジョンイル総書記はこのほか喜んで、顔をほころばせた。

「組織的にすすめたので、気にそまないのに応じたような気配はありませんか？」

「いいえ、喜んでいます」

「よくやりました。妻の方はどうですか」

「元々、温順で無口な女性で、内心はどうか具体的に知ることはできませんが、意見があるとか不満げなようすは見えません」

「うむ… そうですか…」

「彼女は非常に心の深い女性のようにです。結婚式の次の日、先妻の墓所を訪ねて供養をして来たそうです」

「ああ、そんなことがあったのですか」

キムジョンイル総書記は安堵感に包まれて、女性のその心根に満足し温かく言った。

「心の開けた女性のようにですね。心根もきれいで礼儀と風習もわきまえていて… 責任書記同志が人をよく選びました。そんな女性なら安心です」

パクユンシクは偶然にそう言ったとこたえた。

「偶然ではありません。必然です。本当の人間だけが人を正しくみることができます。難しい依頼を引き受けてくれ、ご苦労さまでした」

「…」

パクユンシクは返事ができなかった。

彼はしばらく間をおいて、低い声で言った。

「その日、支援物資を積んで製鉄所に来ていたソントン郡党の責任書記同志が来賓として結婚式に参席しました。

彼は、リグンウ支配人にたいする党の信頼と愛に大きな衝撃を受け、家庭環境と生活経緯が複雑な自分たちのセメント工場責任者にさらに大きな信頼をもって、正式な支配人に任命できるように政治・実務的に準備させると言いました」

「そんなことがあったのなら、それはいい連鎖反応です。ソントン郡党責任書記、彼はりっぱに仕事をしていますか？」

「はい... 以前に報告したように、農業もりっぱにおこない、郡をりっぱに整えていっています。キムジョンイル総書記を自分たちの郡にお迎えする日を指折り数えて待ちながら、情熱に満ちて仕事をしています」

キムジョンイル総書記の眼前にふとソントン郡の山野が浮かんだ。

「あのとき、わたしは一度また訪ねると言っておいて、その約束をまだ果たせずにはいます。そのトナムによく話して、一度かならず訪ねると伝えてください」

「ありがとうございます！...」

「主席は鉄チョル峰ボン鉱山を現地指導されて、労働者の住宅問題解決のために非常に心を砕かれましたが、トナムたちはこの問題をどのように解決しますか？」

「わが道党委員会は主席の教えを貫徹するために、道として力を注ぎ製鉄地区から住宅建設を進めています。その戦闘指揮部責任者に道行政経済委員会のソンギョテ副委員長を任命しました」

「結構です」

まもなく、若い書記が電話で、ハバナに行っていた党代表団が控え室で待っていると報告した。

キムジョンイル総書記はすぐに控え室に向かった。

総書記はキューバ駐在朝鮮大使館が毎日送る電報を通じて、社会主義諸国の党組織書記の会議で、「ペレストロイカ」政策に追従する国の党代表と革命的原則を守る国の党代表の間でくりひろげられた論争や、わが党代表団の活動についてよく了解していた。会議の演壇で「ペレストロイカ」の追従者が騒々しくはりあげる声が聞こえるようだった。政治的多元主義を実現してこそ社会を民主化することができる。国家機関、社会団体にたいする党の指導を廃しなくてはならない。中央集権的な党ではなく民主化された党を..... 党機関の活動を大衆の前に公開せよ.....。

キムジョンイル総書記が控え室に入ると、ハンソク書記をはじめ代表団の成員が立ちあがり、丁重にあいさつした。彼らの顔からは、ハバナでくりひろげられた討論の熱気が、まださめやらないようだった。

キムジョンイル総書記は、代表団が原則的に活動したと評価して、彼ら一人一人の手を熱く握った。

全員が席に着くと、カリブ海の照りつける陽射しと海風に焦がされたように顔が黒くがっしりした体格の代表団団長が立ちあがり、静かに話した。

「カストロ同志はわれわれと会見した席で、キムイルソン主席とキムジョンイル総書記に自身の敬意とあいさつを伝えてほしいと熱く述べました」

キムジョンイル総書記は明るい顔でたずねた。

「カストロ同志は元気でしたか？」

「はい... カストロ同志は、主席が送ってくださった人参茶をいつも飲んでいるので、こんなに健康だと言いました」

「彼がわが国に来たときに、主席が人参茶を贈られたのには深い思いが込められていました。彼が健康だと聞いて嬉しいです。領袖が健康であってこそ、革命は勝利することができます」

代表団の団長が席から立ち上がった。

「今回、... われわれが予想しなかったことがありました。キューバ共産党中央委員会機関紙『グランマ』社長が、キムジョンイル総書記に宛てた手紙と書面質問をもって朝鮮大使館を訪れ、朝鮮の党代表団が帰る便でことづけてほしいと依頼しました。それで、私どもがその手紙と書面質問をもってきました」

代表団団長は、『グランマ』社長、エンリケ・ロマンの手紙と書面質問が入った封筒をもって総書記の前に近づき、丁寧に差し出した。

キムジョンイル総書記は封筒を開けて、手紙と書面質問を読んだ。

社長は手紙に、キムジョンイル総書記にたいする『グランマ』社の全ての社員と自身の欽慕の情を表し、総書記へのインタビューを要請し質問を書面で提起する、と書いていた。

キムジョンイル総書記は慎重な顔で、つづけて読みくだしていった。

...われわれは、質問にたいする豊富な内容が込められたあなたの回答が、愛する貴国についてのわが人民の認識水準を高めるうえで特別に寄与するであろうと考えます。質問は普遍的な問題を含んでいます。それゆえ、われわれが提起した質問を参考にしながら、あなたが意図する問題をどのようにでも含めてくださるよう願います。

われわれの要請に関心を巡らしてくださることに感謝しながら、われわれはもっとも熱く友好的なあいさつをおくります。

あなたに兄弟的なあいさつをおくります。

キューバ共産党中央委員会機関紙『グランマ』社長

エンリケ・ロマン

1989年6月8日

革命31年の年 ハバナ

書面質問は次の通りだった。

われわれは朝鮮労働党が創建されて以降、つねに思想活動を第1に置いていることを知っています。

現在、朝鮮民主主義人民共和国では革命伝統教育をどのような形式と方法でおこなっていますか？

われわれは、党生活においては地位の高低は特になく、だれもが過ちを犯したなら批判を受けなくてはならないという党の政策について理解しています。

このような側面から、朝鮮労働党が国家および経済機関などで現れた官僚主義に反対する闘争を展開した経験についてお聞かせください。

教育活動をおこなううえで、党は保守と沈滞、安逸と弛緩など、古い思想傾向に反対する思想闘争をどのように展開していますか？

革命は代を継いで遂行されます。

党が青年教育事業のためにどんな対策をとっていますか？

あなたは労作において、党活動で古い形式をうちやぶり、すべてを新しく革命的な方法で始めなくてはなら

ないと言われました。

これをどのように実践されており、それについての事例をお聞かせ願えるでしょうか？

幹部教育事業のために党はどのように努力していますか？

そのほかに、わが国の建設経験と祖国統一問題、朝鮮とキューバ両国の党の関係発展の展望について質問していた。

キムジョンイル総書記は、書面質問の内容をみな読んで、タバコを吸った。

ハンソク書記が立ち上がった。

「『グランマ』社長エンリケ・ロマン同志がわが党に手紙を書いて、書面質問を提起したのは6月8日です。今回の会議が終わった翌日です。フィデル・カストロ同志がわが党代表団の活動を高く評価したことや、革命宮殿でおこなわれた宴会で、キューバ共産党宣伝書記がわれわれの団長に、あなたが会議でおこなった演説は非常に立派だったと興奮して言ったのをみても、この書面質問には、わが党の原則的立場にたいするキューバ党指導部の絶対的な共感と支持が込められていると考えます」

キムジョンイル総書記はハンソク書記の言葉を注意深く聞いて、静かに言った。

「あの『ペレストロイカ』の風に乗って帝国主義者の反キューバ策動がさらにひどくなっている条件のもとで、キューバの同志たちが経ている難関と試練は一つや二つではないでしょう。今日、帝国主義者はアメリカに亡命したキューバの反革命分子と御用宣伝手段を総動員して、キューバの党指導部を冒ぼう流とくし、党の指導を放棄せよ、多党制を導入せよと毎日のように騒ぎたてています。経済封鎖を強化しながら…… われわれは彼らに国際主義的な支援をしなければなりません」

「『グランマ』社長はハバナの朝鮮大使館を訪ねてきて、自国の情勢について説明し、自分の手紙と書面質問を必ず伝えてほしいと切々と請願しました」と、団長が丁重な姿勢で述べた。

キムジョンイル総書記はうなずいた。

「この書面質問はみな、社会主義を擁護固守し前進させるうえで提起されるもっとも根本的な問題です。われわれがどんなに仕事が忙しく時間がなくても、キューバの共産主義者の要請に誠実にこたえなくてはなりません」

室内の空気がざわめいた。

その日の夜、キムジョンイル総書記は大テ同ドン江ガンの岸辺を歩きながら、『グランマ』社長が提起した質問にたいする回答の体系と内容を考えた。個々の質問は、その内容からして孤立した問題ではなく、内的に深く連関する問題だった。そのため、一つ一つの質問にそって回答する形式ではなく、いくつかの体系をもつ統一的な論文として執筆しなくてはならないと考えた。

明るい月夜だった。

涼しい川風が吹いてきた。

音もなく悠々ゆうゆうと流れる大同江の川面は月の光を浴びて銀灰色に光り、どこか遠くから夜汽車の殷々いんいんとした汽笛の音が聞こえてきた。

夏の夜の静けさのなかに分け入ったその叙情的な音響のせいなのか、突然、矢のように過ぎ去った20世紀後半期がよみがえり、さまざまな追憶が総書記の胸に波のようにおしよせた。チェ・ゲバラ、ラウル・カストロ、フィデル・カストロをはじめ、キューバ革命の指導者のわが国訪問、長時間にわたった主席との真摯で深刻な単独会談、ブラヤ・ヒロン戦闘、カリブ危機……。

現代修正主義者の対米屈従政策により、キューバに配備されていたミサイルの撤収、裏切られたカストロの憤怒、ボリビア戦線において30代の若さで戦死したチェ・ゲバラ…… 今日ではまた「ペレストロイカ」、親

米路線によってキューバの友人たちがどんな試練を経ていることか。『グランマ』社長エンリケ・ロマン同志の手紙と質問の下地には、キューバの同志たちのわれわれにたいする期待と、社会主義の旗を最後まで守ろうという燃えるような決意が込められているのではないのか！ 彼らに惜しめない支持と声援を送らなくてはならない！

キムジョンイル総書記はこみあげる激情を押さえて歩みを移した。と、数歩前の川岸から真鴨がばたばたと飛び立った。ふりそそぐ月光のなかで水しぶきが白くあがり、鳥たちは大同江の上を1回りと、遠い大洋にでも飛んでいくように、明るい月に向かってはるかに飛び去った。

歩みを止めてそのさまを眺めていたキムジョンイル総書記の眼には、限りなく深い光がやどっていた。……

2

チャヨンジン は歩みを止めた。

空には雲一つなかった。青い空、まぶしい太陽…… ざわめいて火花を散らすようだった。青々と繁る木々はそよ風に葉っぱをひらめかして新鮮な精気を漂わし、鳥たちはさわがしくさえずりながら、木々の間を飛び回っていた。

おもむろに、彼がセメント工場に入る道を歩いていくと、工場の方から一人の女性がゆっくりと歩み出てきて、明るく笑ってあいさつした。チュサンミンの妻だった。

「チュトナムに会いにきたのですか？」

「薬を忘れて行ったので…」

「薬は決められた時間に飲まなくては… 子どもたちはよく勉強していますか？」

「アボジがあんなになって、子どもたちが急に変わりました。とても熱心に勉強しています… 手伝いをさせても…」

「そうですか…」

「アボジが本当の支配人になったという噂がたと学校の担任の先生が家にまで訪ねてきて、わたしにあいさつするのはですよ。わたしにおかまいなしに、皆がわたしをつかまえて、嬉しいでしょう、良かったですねとか騒々しくて、何と言えはいいのかわかりません」

「それが心配ですか。嬉しいとか、よかったとか言えはいいのです。踊りを踊りたければ踊って。ハハハ…」

責任書記のおかしそうな声に彼女もつられて笑ったが、急に不安に襲われたように、顔を曇らせて口をつぐんだ。両眼には涙が浮かんでいた。

「責任書記同志。教えてください。こうしているうちに… こうしているうちに、何かおこるのではないのでしょうか？」

不吉な予感についての訴えだった。

「皆が喜んで騒いでいるのに、一緒に喜んでいても急に怖くなります。心が緩んだすきに災いが生じるような気がして…」

彼女の目じりに涙が光った。皆が喜んでいるときに、ひとり妻だけは喜んでばかりいるのではなかった。不安感というのは愛情の反映であると、誰かが言ったのを思い出した。

チャヨンジンは感謝の美辞麗句が省略された、このような真実の気持ちを聞くことによって彼女をさらに信頼し、思いが通じて心を開くことができた。

「われわれがどんなに心を尽くしたといっても、奥さんには及びませんが…」われしらず、ため息が出た。

「わたしも、そのような心配がなくはなかったのです… われわれはしっかりと… 性根をすえて病気の治療をしましょう。いいですか？ 精神力がくじけてはなりません。奥さんもわたしも、彼の心を支えるそえ木に

なりましょう。信念をもって忠誠でこたえるように... 生活も明るくして... わかりますか？」

彼女は彼の言葉によって心が落ち着き、実の妹にでもなったように従順にうなずいた。ヨンジンは、何かもっと暖かく情のこもった言葉をかけてやりたかったが、よい言葉が思い浮かばなかった。

「...学生時代に聞いた昔の話を思い出します。ある母親が戦場で致命傷を負って家に運ばれてきた息子の介抱をしました。あらゆる手を尽くして... そして、昼も夜も息子の手をしっかりと握っていたそうです。息子は重体だったのですが、時々目を半分開けて母親を認めては気力をふるいおこしていましたが、看病に疲れ果てた母親が3か月と3日が過ぎた明け方、ちょっとの間まどろんで息子の手を放してしまいました。朝、目を覚ましてみると、息子はすでに息をひきとっていたそうです...」

彼女は潤んだ目で彼の顔をじっと見つめた。

「奥さん、われわれが気をしっかりとって病気の治療も積極的におこないましょう。サンミントムの精神力が衰えず、病魔を最後までおさえつければ、完治します。そうではありませんか。何か困ったことがあったら、わたしにすぐに知らせなくてはなりませんよ」

「ありがとうございます。責任書記同志...」

彼女は、頭を深くとさげてあいさつすると、歩きだした。チャヨンジンは胸が痛んで、チョゴリの紐をひるがえして歩いていく彼女の後ろ姿をしばらく見守っていたが、おもむろに工場への道を歩いていった。

セメント工場の構内は支援にきた人々でごったがえしていた。支援者たちは焼成炉周辺のコンクリート舗装をしたり、前庭を平らにならしたり、倉庫をはじめ付属建築物を建てて、新しい焼成炉を築こうと騒々しかった。正門の側に止まった宣伝車から聞こえてくる、のびやかな民謡の調べが労働意欲をさらに高めた。新しく建てて松やにの匂いがする事務室の前では、細胞書記のパクジェスンが椅子にあがって、出入口の門の上に板をあてて4隅に釘を打ちつけていた。板には赤いペンキで「生産指揮部」と書かれていた。

チャヨンジンは後ろ手を組んでその表札をながめていたが、思わず「良くできたな！」と声を出した。

パクジェスンは後をふりむき、驚いて椅子から飛び下りた。彼は自分が支配人に任命されたかのように、非常に興奮した様子だった。

「あれはだれが書いたのかね？」

「わたしが書きました」

「ほう、達筆だな... チュトムはどこにいるかね？」

「中にいます。部屋を整理しようとして...」

室内では、チュサンミンが顔が黒く目のきれいな乙女と一緒に備品を片付けていたが、責任書記が入ってくると、歓迎しながらも当惑した顔であいさつした。

「申し訳ありません。部屋を整理しようとして...」

「かまわないよ。一緒にやろう！」

郡党責任書記はこう気軽に言うと、彼らの手伝いをした。彼は、チュサンミンに自分の場所を自分で整えなさいと言うと、パクジェスンとともに机と応接卓をカギ型に置き、書棚と鉄製の書類函を移して内壁に整然とくっつけて置いた。そうして室内をぐるっと見回し、窓の上にまがって掛かっている拡声器をまっすぐになおし、椅子の上に置かれていた黒い電話器を機の端にきちんと置いてやった。目のきれいな乙女は、郡党責任書記までが足を運んで来て手伝うので、はりきっててきぱきと書棚や応接卓、机の上を雑巾で拭いた。

ヨンジンはその乙女に、こんな日には歌がふさわしいが、鼻歌でも歌ったらどうかといてニッコリ笑った。乙女はそのことばに肩をすくめて顔を赤らめ、歌はおろか息もできないという様子だったが、てきぱきと雑巾がけをするまめな乙女の視線からは、思いを込めた切々とした歌声が流れでてくるようだった。その乙女が雑巾がけを終えてバケツをもって出ていった後、チャヨンジンは応接卓の横に座って(パクジェスンも彼の側に座った)チュサンミンにやさしく言った。

「サンミントム、席に座りなさい」

チュサンミンは気軽に座ることができず、机の横にためらって立っていた。感激と興奮、感謝に胸がいっぱいで、その席に座ることをためらっているようだった。

「座りなさいというのに...」

重ねて言うと、彼は体になじまない席にやっと座った。

「今後、セメントがさらに必要となるが、どんどん保障しなくてはならないね」

「はい、わかりました」と、彼は言葉の端々に思いをこめて答えた。

「セメントの質をさらに高めれば良いのだが... 今のは少し弱いようだ。里に出ていく道を舗装するには強度が少し高くないとまではならないのだが...」

「病気になる前に試みた創案が成功すれば、質を高めることができます。明日、再度実験してみようと思います」

「そうか、やってみなさい...」

電話が鳴った。チュサンミンは電話器を見つめるだけで、それに手を伸ばすことができなかった。チャヨンジンが電話を取るように促してはじめて、彼は受話器を重そうに持ち上げ相手の話を聞いたが、受話器を責任書記に渡した。受話器からクヨンセの声がはっきり聞こえてきた。

「責任書記同志、製鉄所からわれわれに支援物資を積んで来るとのことです。明日、午前9時ごろに出発する予定だそうです」

チャヨンジンは喜びのあまり声をあげた。

「本当か？ それは どうしたことだ？」

「体育館のトラス用L型鋼と溶接設備など、みな積んで来るそうです。技術者まで...」

「おい、これは じっとしていられないぞ」

「それで、歓迎のため、もてなしの準備でもしようかと思えます。わたしに任せてください。みごとにやってみせます！」

「そうしたまえ。ハッハハー」

彼の豪胆な笑い声に狭い事務室が揺れるようだった。

夕方、クヨンセが責任書記の部屋に訪ねてきた。彼はすでにお祭り気分になり、すこし浮き浮きした顔で支援物資を積んでくる労働者たちを迎える計画について説明した。...郡内の建設者と少年団員を動員して沿道歓迎を組織する、宣伝隊の吹奏楽が奏でられるなかで、郡の責任幹部たちが労働者たちとあいさつをし、歓迎のことばを述べ、女性と少年団員がかけよって支援者たちの首に花輪をかける、このとき、宣伝車の拡声器から音楽とともに感動的な扇動スローガンがわきおこる、屈強な建設者がかけだしてお客たちを肩車に乗せ、体育館建設場まで上がってきて、沿道では彼らに花吹雪を投げかける、食事会を準備する、食事会は総合食堂ではなく、小川のほとりの柳堤に設ける、食事には郡の特産物と若干の酒類を出す、その準備と接待は食料工場支配人のリスンヒに責任を持たせる、食事の後、連帯集会を催す、連帯集会では郡党責任書記が発言する。

「歓迎の雰囲気は良いが、内容がないな」

「内容ですか？ それで食事会を入れているではありませんか」

「そういうことではなく... 政治性をもって準備しなくてはならない。行事に貫かれる思想がないよ」

「はい... 少し、弱いです」

「弱いのではなく、ないよ。あいさつの言葉にも扇動スローガンにも、音楽にも、労農同盟を強化しようという思想が... 都市の労働者階級が農村を支援し、農村の農業勤労者が都市の労働者階級を支援して、一心団結の威力で社会主義建設を促進しようという思想が強く響き出るようになってはならない... その労働者たちにわれわれの建造物を見せながら、郡の位置と役割にたいする党の構想を実現するために郡内の党員と勤労

者たちがどのように働いているか、説明もしてやり…」

「そのようにします」

「酒類を若干出すというのは、何かね？」

「ビール程度を若干…」

「昼間から、あまり出さないようにしなさい」

「明日は日曜日ではありませんか」

「しかし、…」

「はい…」

「特産物というのは何かね？」

「あのソントン湖に、鯉が群がっているではありませんか？」

「ああ、そうだね。食事の準備と接待はどうして食料工場支配人に責任をもたせるのかね？ 食堂の支配人がいるのに…」

「あのお婆さんにどうして任せられますか。こんなことには食料工場支配人のリスンヒが適任ですよ。りっぱにやりますよ。印象も良いし… 以前には、食堂にいたではありませんか」

「連帯集会でわたしが発言するというのは除きなさい。トンムがすべてを主幹するのだから、トンムがしなさい。わたしもひまをみて行くようにするよ」

チャヨンジンは次の日の午前、村の道が吹奏楽の音や宣伝車の扇動スローガン、音楽の音、歓呼の声でわきかえっているときにも、執行委員会を開いて幹部問題をはじめ、さまざまな党内部の活動を討議したので、出かけることができなかった。彼が昼食を終えてから柳堤に出かけてみると、連帯集会の真っ盛りだった。

チャヨンジンは、祝日気分で顔を紅潮させているクヨンセ副委員長の案内で、お客の席の方に行き、製鉄所から委任されてきた建設担当副支配人をはじめとする支援者たちとあいさつを交わし、彼らの間に入って座った。50 余名の人々が草原にぐるりと車座になって座ったなかで、製鉄所の快活な労働青年が前に進み出て、詩の朗読をしていた。製鉄所の体格の良い建設担当副支配人が側に近寄って座り、うわずった声をあげるので朗読を聞くことができなかった。彼はヨンジンの膝をトントンたたいて、満足だ、お客の接待を見てもソントンの人たちの人柄がわかる、今後、ソントンから提起されることはみな解決してあげよう、鉄鋼材の心配はしなくていいなどと言い、際限なくどくどくと話した。お客をとがめることもできず、彼の手をとってありがとうと繰り返しお礼を言ったが、彼は話をやめなかった。

クヨンセは、向かい側に並んで座った人々の後ろで、食料工場支配人と向かい合って、器用に手を使いながら何か熱心に話していた。華やかな薄水色の洋服をまとい、首に真紅のスカーフを結んだリスンヒは、何がそんなに嬉しいのか、手を口にあてて笑っていた。

宣伝隊の女性5名が男性アコーディオン奏者とともに前に出て、深々と頭をさげてあいさつすると、アコーディオンの力強い前奏に続いて重唱を始めた。このごろ青年たちの間で流行っている「忘れまい、われらの友情」という歌だった。こざっぱりした赤衛隊服姿の乙女たちはふっくらとした胸の下で両手を合わせ、心もち体を前後左右に揺り動かしながら叙情的な中音で歌った。

忘れられない青春時代 トンムよ
われらの友情は どこで花開いたか
親愛なる指導者同志の
その懐で花開く
ああ いつも忘れまい われらの友情

歌は高潮して歓喜の旋風が座中を包んだ。人々は興に乗って歌に合わせて手を叩きはじめた。大気がざわめいてだらりと垂れていた糸柳の枝が揺れ、人々は興にまかせて手がちぎれるほど拍手をし、互いに肩を組んで体を左右に動かした。重唱をした5名の乙女が急に草原に散らばって拍手をし可愛らしく手を振ったかと思うと、しなやかに腰をふりながら踊り始めた。とたんに、製鉄所から来た労働者青年と郡の農民青年が堰を切ったようにわーっと踊りの場に押し寄せた。彼らは乙女たちと対になり、あるいは自分たちでそれぞれ対になり、また個々に踊りを踊り、歌を歌った。

われら共に 互いに助け導き
われら共に けわしい峠をこえ
真の友情が何かを知った
何かを知った

チャヨンジンは、労働者青年と農民青年が交じりあって踊りを踊るその調子と音楽がかもしだす叙情と歌詞の思想的な意味に胸がじんとして目頭を濡らし、草原に座ったまま手を叩き、口の中で歌を歌った。側に座った建設担当副支配人は、歌は歌わなかったが、思わず肩をゆずらせて拍手をしたかと思うと、「いいぞー」「いいともー」と声のかぎりに叫んだ。

同志のためにささげる愛なくば
われらいかに友情を語ろうか

...

その日、クヨンセは、体育館のトラスを組み立てるために郡に残った6名の溶接技能工を、郡旅館の一番良い部屋3室に入れ「貴賓」として歓待するようにした。

彼らが壁材だけ立っている体育館の横で、溶接の火花を飛び散らせてL型鋼を必要な規格で作りと、トラスを組み立て始めると、その噂が村じゅうに広まり、スポーツ愛好家と青年学生の関心を集めるようになった。人民学校に通っている子どもたちまで体育館を訪ねてきて、すこし離れたところに並び立って溶接するのをながめ、おもしろがって騒ぎたてた。休みには少年団扇動隊が太鼓をたたきながらやってきて小公演をおこなった。旅館を訪ねてきて、平野地帯では見られないめずらしい花々を生けた花瓶を部屋ごとに置いていく乙女たちがいれば、めずらしい食べ物を作って訪ねてくる女性もいた。スポーツ愛好青年は作業場にやってきて溶接作業を不慣れながら手伝い、夜ともなるとビール瓶をもって旅館の部屋におしかけ、支援者たちとともに楽しい時間を過ごした。

人々のこのような声援に励まされた溶接技能工は、疲れを知らず昼に夜をついで溶接の火花を飛び散らしながら、トラスを一つ、一つ組み立てていった。

5日後、チャヨンジンは遠く離れた里に出かけて里党の活動を助け、早朝に郡党に帰ってきたが、ホテルの前でクヨンセ副委員長とホテルの責任者の婦人が立ち話をしているのを見て、車を止めた。

クヨンセが顔を真っ青にしてあたふたと彼の方に近寄ってきて、昨夜、溶接技能工がみんな引上げて行ってしまったと言った。

「製鉄所から建設作業所のある作業班長だという人が来て、労農赤衛隊の非常招集だということで、みんな載せていったというのです」

ホテルの責任者の婦人は、自分の落ち度でこのようなことが生じたともいいうように、青ざめてチョゴリの前まえ社おくみをいじっていた。

「だれにも知らせずに旅館にだけ言って、行ってしまいました」

「非常招集だということだから、そうしたのか？... いつ、戻ってくると言ったのかね？」

「溶接設備までみな載せて行きました...」

チャヨンジンは、後頭部を殴られたように頭がくらくらした。

「なんだって？」

「がまんできますか。いま、ここにきた建設担当副支配人に電話しました。非常招集というのは作業班長という奴の使った手で、事実は違うというのです。ソンギュテ副委員長が製鉄地区に出かけて住宅建設を責任をもって進めていますが、外部に動員された人員をすべて召喚するように言ったそうです。その副支配人が言うには、自分たちが越冬キムチ用の白菜とトウガラシ、ニンニクなどを入手しようとして、付近の農村地帯に技能工たちを派遣して交換条件としてそこの建設を助けたので、それで人手をたくさん費やし、雷が落ちたというわけです」

「でたらめな話だ。製鉄所の副業地がどれだけあると... キムチの材料はいつも供給して余っていたらう」

「そうですね、そうだと思いますが... 今年はよくできなかったのではないのでしょうか。副支配人は、自分が、われわれのため溶接技能工をそのまま置いておきたいと懇請したが、指示を貫徹するためだというので、どうしようもなかったと言いました」

チャヨンジンはその話を信じたくなかった。自分が家を訪ねたとき、ソンギュテ自身が郡の建設を助けると言ったし、ひっかかっている問題を解決してやろうと言ったことから考えようと骨をおった。彼はそれ以上話さず車に乗った。クヨンセはついてくるように言わなかったにもかかわらず車に乗り込み、郡党に着くと責任書記の部屋までついてきた。

ヨンジンは応接卓の横に座ってタバコをくわえ、気軽に側に来て座ったクヨンセにもすすめた。2人はしばらく黙ってタバコばかり吸っていた。彼らのはき出す薄青いタバコの煙が頭の上に舞い上がりもつれて、薄霧のように室内にたちこめた。

「一度、ソンギュテ同志をそっと訪ねてみませんか？」と、クヨンセが控え目にすすめた。

「...」

クヨンセは、じれた内心を吐き出すような溜め息をついた。

「わたしをどう思おうと構いませんが... これには個人的な感情がこもっています。その人の怒りがあります。確かに...」

チャヨンジンは応接卓に視線を落とし、沈ちん鬱うつな声で言い返した。

「それはどういうことだね？ トナムの考えでは、道副委員長がある感情をもって、私心をもって仕事しているかのようなではないか？」

「そうですよ、彼も人間ではありませんか？ 感情をもった人間ではありませんか？」

「やめたまえ！」

「いや、ちょっと言わせてください。ことがこのようになったからには、わたしもちょっと言わなくてはなりません。話をみな聞いて、生かすなり殺すなり思い通りにしてください。... このようになったのは、責任書記同志にも責任がありますよ。自業自得ですよ。病気で寝ているソン副委員長をたずねるとき、手ぶらでちゃかちゃか行ったという話を聞きましたが... 昔の誼よしみを考えても、見舞いでも少し持っていったらどうなのですか。ここでは補薬も良いものを作っているのだから、何本か持っていったらどうなんですか？ 患者に持っていくものも賄賂ですか？ え？人情が通じてこそ話すのも易しく、仕事をするにもしやすく... あちら側にも助けたいという思いが出てくるのではありませんか。処世の術すべを知らないから人々との関係が融通がきかなくなるほかなく... 以前、タンスのために大きな欠陥でも生じたかのように騒いだのをみても、苦勞するなと思いました。そのとき、噂が郡内にぱっと広まって、皆が縮み上がってしまい、里にいても昼食

一つ出すのも顔色をみながら、卵1個出すにも用心しました」

「そのようになったのなら、いいことだ」

「ほー そんなに言わないでください。正直に言えば... 事実は、道に栄転した前任のソン副委員長が、ここでの生活上で、落ち着くまではわれわれが世話をするのが道理ではありませんか？ 責任書記同志がそんなふうだから、みな心の中では思いながらもどうにもできず、訪ねていくのも人目を気にしながら隠れて... これはどういうことですか。わたしは同志的に言います。以前に建てたものを急に打ち壊して新しく建てながらも、あいさつ一つなく... わたしでも寂しい思いが... 怒るのも無理からぬことです。ソン副委員長は近くの郡などにしばしば来ながら、われわれの郡にはできるだけ来ないようにしているのを見てください。それでも感情がないというのですか？ え？ わたしでも、ソントンに行っている溶接機も例外なく撤収せよと言ってしまおうでしょう！」

チャヨンジンはがまんできず声をあげた。

「やめなさい！」

クヨンセは顔を赤くし、びっくりした目で責任書記を見つめた。

「おや、どうしてですか？」

「トムムが、彼をどのように見るのか。みだりに...」

「あ、ああ、そう言わないで下さい」

「...」

「けっこうです」と、クヨンセはふるえながら外に出ていった。

彼が出ていった後、ヨンジンはブルブルふるえる手で、かろうじてタバコの火をつけ、ほろ苦い煙を思いきり吸い込み、フーッと吐き出した。彼は片方の手で冷や汗が出た額を支え、考えに沈んだ。胸がドキドキした。クヨンセは不謹慎なことを言っていると思いながらも、彼が自分の思想精神的水準で見て感じた真実の一端を言っているのではないかという、驚くべき考えが心の片すみに忍び込んだ。

「ソングユテという活動家はどんな人物なのか？ クヨンセトムムの言葉どおり、そんな世俗的なことでわたしに感情を害するとしたら... ああ、あれほど原則的で人情味のある活動家だったのに。何が... いったい何が彼をこのようにしたのだろうか？ 道の一責任幹部として、個人的感情や私心で仕事をするとするならば、その弊害は深刻だ。以前の関係にとらわれず、彼の誤りを正さなくてはならない。個人的に意見を言ったものか、組織的に解決するべきか...」

つきない思いに浸り、虚空の一点を見つめる彼の目が光っていた。

3

翌朝、チャヨンジンが道党に出かけようとする、けたたましく電話が鳴った。

その時分になるといつもかかってくる経営委員長の電話だろうと思ったが、受話器からは郡安全部長の声が聞こえてきた。驚くべき報告だった。早朝に起こった地震によって、村の通りの十字路近くのアパートで大きな破裂音とともに深い亀裂が入り、寝ていた人々が仰天して外に飛び出すという騒ぎが起こった。うわさが良くなかった。人々は、壁がひどく割れたのを見て、家をどう建てたらこんなになるのかとあって、建設した人々を非難していた。朝、その家のベランダがそのまま崩れ落ちた。ほかの家でも亀裂が2か所に入っているのが発見された。人々はあの程度の揺れでこのようになったのを見ると、家を建てたときに工事をいい加減におこなったか、セメントの質に問題があるのではないかといいながら、自分たちの住んでいる家も安心できず、不安がっていた。その2棟のアパートは、3年前に郡で生産したセメントで建てたものだった。...

その信じられない事件のために、道党にいこうという考えは泡のように消え去っていた。

チャヨンジンは事故現場にあわてて駆けつけた。問題のそのアパートは、拳が通りぬける程度の亀裂で二つに割れていた。一足遅れて事故現場に着いたクヨンセ副委員長は、顔を真っ青にしてアパートを見回り、人々を他の家に住まわせて、2棟のアパートはあけておくようにした。

その思いがけない事故は、法機関の注意を引かざるをえなかった。検察所のパク検事と郡安全部の課長が事故現場を見回り、亀裂の広さと深さ、長さを計ってみて、写真まで撮った後、セメント工場に出かけ、労働者とチュサンミンに会って、次の日、彼を検察所に呼び出した。3回も審問に近い面接談話をおこなった。

ある日の午後、検察所長がチャヨンジンを訪ねてきて、チュサンミンを勾留して取り調べると提起した。チャヨンジンは声を上げた。だめだと…。

検察所長は、意図的か否かは別として、不良セメントを建設場に送ったことについては、法務生活の要求に照らしても法的な追及をしなくてはならない、彼は前科者ではないかと主張した。

チャヨンジンは言った。事故の原因はセメントにだけあるのではない、設計、施工、建物の管理利用にも欠陥がありうる、一人の人間に罪因を人為的に作って、彼にすべての責任をなすりつけてはならない！ 検察所長はひきさがらなかった。いろいろな細かい原因はあるが、根本原因がセメントにあるから、チュサンミンに注意が集中せざるをえないと言った。

チャヨンジンは断固として言った。そうだとしたら、セメントの技術検査資料をもって来るがいい、それを審議する前に、チュサンミンには絶対に手をつけられない。検察所長は顔を赤くして立ち去った。

その日の夜、チュサンミンがいなくなった。朝、息を切らして郡党から走ってきたセメント工場の細胞書記パクジェスは、チュサンミンが妻に道セメント工場にちょっと行ってくるといって家を出たと言った。道セメント工場に確認したが、そんな人は来なかったということだった。彼はどこに消えたのか？…

一方で、チュサンミンが行きそうなところをすべて確認し、彼の行方を探しているとき、一方では不吉な世論の暗雲が人々の心のなかに忍び寄っていた。チュサンミンは功名心につかれて質の悪いセメントをいっぱい生産し、今になって責任がこわくて逃亡した…。5日が過ぎ、6日が過ぎても彼が現れず、世論はさらに厳しくなった。彼はどんな人間なのか？ ここに来る前にすでに罪を犯し、寛大な処分で生きのびた前科者だ。彼の父はわれわれの制度に背いて南に逃亡した反逆者だ。そんな奴にセメント生産に責任を持たせること自体が間違っている。他の住宅もこれからどうなるかわからない…。

チャヨンジンは当該機関で事故の原因とチュサンミンの行方も探しているので、根拠のない憶測をしてはならず、むやみにだれかを疑ってはならないと強調しながら、党組織を通じて大きくなる世論を落ち着かせようと骨をおった。軽率なことを言ったり広めたりしようとする人をきびしく批判するようにした。そうしながらも、ふと錯綜した疑心が満ち潮のように押し寄せて、彼にたいする信頼が水を吸った土塀のようにぼろぼろと崩れおちるのをどうすることもできなかった。彼は本当におじけづいて逃亡したのではないのか。絶望のすえに極端な考えが生じて、どこかに隠れていてすでに死んでしまったのではないのか。ああ、人間というのはこれほど背信的で利己的な存在なのか… ちがう。そんなはずはない！

チャヨンジンは彼が石灰石の塊をもって山から駆け降りてきたこと、セメントの質を高めようと創意的に考案していたこと… 過ぎ去ったあれこれを思い起こし、失いかけた信頼の心を取り戻した。

ある日の夕方、彼がチュサンミンの妻にまた会ってみようと事務室を出ようとする、組織部の責任幹部が入ってきて、道党委員会では了解するまで、当分の間、活動を控えた方がよいという意見を伝えにきたと言った。

「活動停止ということか？」

「…」

「発生した事故のためではないのか…」

「それもそうですが、道党に申訴が提起されたようです。申訴の内容が報告されて… 党中央委員会組織部の副部長同志が道にやってきました。道党検閲委員長とともにここに向かったそうです」

「わかった」と、ヨンジンは泰然とこたえたが、目の前が真っ暗になった。この数日間のできごとを思い起こすと、偶然がすべてつながって自分を運命の断崖に引きずっていきこうと必死になっているようだった。...

日がとっぷり暮れて、党中央の組織部副部長一行が郡党に到着した。

道党検閲委員長は深刻な顔つきだったが、組織幹部らしいところが全くなく従順で無難でありながらもどこか古風で質朴に見える組織部副部長は、ヨンジンの手を握ると明るい顔でリュスミョンだと自己紹介した。そして、日常茶飯事について話すような語調で、申訴が提起された問題を了解しようとしてきたと言い、あいさつの言葉をいくつか交わすと、明日また会いましょうという言葉を残して旅館に行ってしまった。

チャヨンジンは部屋に一人残った。彼は心を静めることができず、いたずらに室内を行ったり来たりし、突然、何かに驚いて立ち止まった。あの副部長と顔の印象が似た人とどこかで会った気がしたのである。しかし、過ぎ去った生活の節々をどんなにふりかえってみても、いつ、どこで会ったのか、まったく思い出せなかった。その次には、他の考えが脳裏をかすめた。申訴問題だというのが、どうして組織部副部長が来たのか？ ひょっとして... ひょっとして... キムジョンイル総書記が直接派遣されたのではないのだろうか?! 考えがこの方向に向かうと、不安感、緊張感はあとかたもなく消えて、深い自責感に胸がおしつぶされるようだった。郡を立派に建設してキムジョンイル総書記を迎えたかったが、どのように活動したと申訴問題まで報告されることになったのか？

次の日から、ヨンジンは活動停止を受けた措置として、受話器を電話機からとりはずし、ずっと応接卓に座って自分の活動と個人生活の全般を反省しながら、組織部副部長の活動を気に止めないようにしようと骨をおった。

しかしそうできず、しばしば神経を使うことになった。彼らが郡党に人々を呼び入れるのでなく職場に出かけて会うので、ことが次第に尋常でないほどに広まってしまったのを肌で感じる事ができた。自分が郡党責任書記として任命された後、おこなってきたことが思い出され、鬱憤が沸き上がるかと思うと、自身の活動と生活にすきが多かったという思いが生じて、限りない罪責感にさいなまれるようになった。胸がじりじりと焼けるようだった。あるときは喉の中でいぶすような臭いが漂ってきた。だれも訪ねて来なかった。党の規律であることが分かりながらも、寂しい思いがなくなかった。

ときおり、夜が深くなると若い組織書記が入ってきて、帰りませんかとたずねた。そのたびに、チャヨンジンはチュサンミンの行方は分かったのかとたずねた。組織書記は弱りきった顔で、まだ分からないと頭をふってみせた。帰りの道を並んで歩きながらも、それ以上活動の話はしなかった。

チャヨンジンは、だれが申訴したか、申訴内容は何か、了解過程でどんな問題が提起されたのか... 知りたいことは一つや二つではなかった。もちろん、リュスミョン副部長が最終的にすべてを知らせ、提起された問題にたいする意見まで聞かせてくれるだろうが、一刻も早く知りたかった。何も知らない状態で煩はん悶もんするのでさらに苦しくなり、だれかの手でもつかんで哀訴し、たずねもしたかった。この組織書記は何か少なからず知っているようであり、たずねれば知っているだけ教えてくれるかもしれなかったが、党規律を破ることはできず、また自尊心のために口をかたく閉ざして一言も聞かなかった。

だからといって、何もなかったように虚勢をはり、スポーツのニュースや湾岸戦争についての話をすることもできなかつた。それで、2人は黙って帰り道を並んで歩くしかなかつた。

ある日の夕方だった。思いがけずソングユテが彼の部屋に現れた。ソングユテは血色の良い顔に意気揚々とした表情を浮かべて、リュスミョン副部長がわたしまで呼び出したのだが、これはどうしたことかと言い、応接卓を間にはさんで彼と向かい合った。そして、製鉄地区からの帰り道だと言いながら、タバコを勧めた。チャヨンジンは、以前の感情は消え去り、彼が訪ねてくれたことがとても嬉しかった。

「わたしが活動をよくできなくて、このようなことが起こりました。申し訳ありません」

「とんでもない話だ... 仕事をしようとすれば過ちを犯すこともあるさ。ところで、どうしてそんな顔をし

ているんだね？ マラリア患者のように...」

ヨンジンは頭を落として、胸が落ち込むような溜め息をついた。

「なんだ、ヨンジン。いつ、そんな小心者になったんだ？ 八八八...」

「あまりに息がつまって、こうなったのです」

「わたしの落ち度もある。引き継ぐときにチュサンミン... 奴について強調したかったのに、それを忘れてしまった。忘れたのだ。大きな問題ではないのでそうしたのだが、じつに...」

「...」

「製鉄地区から道に入ってきて、話を聞いてびっくりしたよ。君、あんな奴にセメント生産をそっくり任せるとかやりすぎだ。道に行ったあとそんな話を聞いて妥当でないという思いがしたが、そのときわたしが忠告したとしても受け入れたかね？ 信頼せよ、包摂せよというのが党の政策ではあるが...」

「わたしは信じたのです。信じてやれば忠臣になるという言葉もあるではありませんか」

「それはそうだが... 後に何か事が生じたらどのように責任をとろうとして、そんな冒険をしたのかね」

チャヨンジンは顔をあげて彼をじっと見つめた。抗弁したくても、信じて重大な事態をひきおこした自分としては、言う言葉がなかったのである。

「チュサンミンは... 奴はどこにいったのだろうか？」

「まだ行方がわかりません」

「君、リュスミョン副部長の前で自己批判をよくしたまえ」

「その...その、副部長同志がわたしが知っている社会科学院のある博士と顔が似ています。名前も同じよう... 兄弟ではありませんか？...」

「リュスジン博士のことかね？」

「知っていますか？」

「知っているとも」

「そうですか... 人民経済大学にいつて学んだとき、博士の講演を聞き、論駁したことがありました。たぶん不快だったでしょう」

「人というのは分からないものだね。その兄弟が了解するためにやって来るとは、じつに人生とは... ヨンジントムには、たしかに改めなくてはならない問題がある...」

ソンギユテがリュスミョン副部長が泊まっている旅館に行ったあと、ヨンジンはタバコを続けざまに吸いながら苦悶にさいなまれていたが、夜が更けて帰途についた。彼は妻が待つ家に向かって、人気のない通りを重い足どりで歩いた。しんとした静寂のなかに、彼の足音だけが響いた。霞のかかった道はその足音に耳を傾け、遠く近く、まだ消えていないいくつかの灯火が、彼を見つめているようだった。うつむいて黙々と歩いていたチャヨンジンは、突然、だれが申訴したのかという考えが浮かび、足を止めた。

鬱憤うっぴんがわき起こった。彼は闇に包まれた家々の窓を一つ一つ見回した。だれが申訴したのか、わたしに恨みをもつ人はだれなのか？ わたしはいつも、郡内の人民が都市や平野地帯の人々とかわらず、豊かに文化的に暮らせるようにしようと昼も夜も心を砕いてきた。わたしに汚れた私心でもあったのだろうか、わたしがだれかの運命を侵害したり侮辱したことであったのか... 彼はしばらく闇のなかにたたずんでいたが、再び歩きはじめた。何歩も行かないうちに他の考えが鞭むちのように良心をさいなんだ。どうであれ、人民のなかから申訴が提起されるようになったこと自体が罪悪だ。これは罪悪だ、罪悪だ！ あの副部長同志が直接きたのをみると、道党からこの事態を党中央に報告し、キムジョンイル総書記がひどく心配して彼を送られたのではないのか.....

窓におぼろな光がさしていた。

キムジョンイル総書記は人民武力部長とともに打撃軍団の軍部隊の夜間戦術訓練を視察するために出発する時間になっていたが、今しがたリュスミョンを呼び、室内を歩きまわっていた。道党委員会が報告した郡党責任書記チャヨンジンについての申訴内容は、信じがたいものだった。

郡党責任書記は階級性がなく、不純異色分子にセメント工場を任せた。その者は、階級性が曇った責任書記の信任を悪用して害毒行為をおこない、強度が保障できない不良な偽セメントを生産して建設場に送った。この者は自分の正体がばれると姿を消した。すると、人民のなかから郡党責任書記にたいする不満の声が噴き出した。責任書記は強権を使って人民の声を抑圧した。人民は責任書記がそのような不純異色分子を抱えながら、敵に殺された人や戦死者の家族をはじめ、基本階級出身の人民の生活に無関心で、とくに青年学生の前途を保障してやらず塞いでいるために、さらに憤慨している。人民が信じ従う朝鮮労働党の郡党責任書記がこれでもいいのか…。

申訴内容がすべて事実であるなら、許せないことだった。

キムジョンイル総書記は啞然とし、リュスミョンに道党幹部とともに郡に下りていき、郡党責任書記の活動と生活を全面的に了解するようにと指示したのである。

キムジョンイル総書記は彼を派遣した後も、憤激と疑惑、錯綜した憂慮で仕事が手につかず、思いにふけるときがしばしばだった。国の200分の1を占める一つの郡で、一人の党活動家にたいする怨恨がここまで蓄積したとすれば、民衆のために献身服務するわが党に重大な損失とならないわけがなかった。

はやくから党中央委員会に入り党活動を指導しはじめてから、民衆のために闘争するチュチェのわが党は人民の絶対的な信頼を受けなければならず、そのためにはどの党活動家も人民のなかで塵ちりほどの意見や不満も生じないように人民の忠僕らしく働こうというのが、キムジョンイル総書記の決心だった。そんなキムジョンイル総書記にとって、チャヨンジン責任書記にたいする申訴はがまんできない問題だったのである。

リュスミョンが部屋に入ってきた。陽光と風で日焼けし、少しやつれた彼の顔は明るくなかった。

キムジョンイル総書記は、彼に椅子を進めてから、急いでたずねた。

「了解が済みましたか？」

リュスミョンはすぐに応えることができず、ためらった。再度促されると、彼は当該機関が逃走者の行方を探しているところで、提起された問題の根本原因を明らかにすることが難しくなったと答えた。

「提起された問題は、みな事実ですか？」

「事実とそうでないことが混じっています。郡党責任書記が敵に殺された人や戦死者の家族の生活に無関心で、青年学生の前途を保障していないというのは事実ではありません。チャヨンジントムは責任書記として任命された後、仕事をたくさんおこないました。彼は農業を発展させ穀物生産高をひきつづき高めてきたし、地方産業を新しい技術で装備して人民生活をめざましく改善し、とくに中央と道の助けを受けずに自らの技術と労力で建設を大々的にくりひろげ、郡の面貌を一新しています」

リュスミョンは興奮して顔を赤くしながら、若干ふるえる声で報告を続けた。

「百余名の青年学生を中央と地方の大学に送り、道共産大学と人民経済大学、商業学院、被服専門学校、料理専門学校などに送りました。一つの条件をつけて… 卒業して郡に戻ってくるという約束をとって送りました。彼がさえぎったのは… 一部の青年が都市と平野地帯に流出することを厳しく統制したことです。経済生活と道徳生活では提起されることはありません」

「セメント問題はみな事実ですか？」と、キムジョンイル総書記が心配そうな顔で静かにたずねた。

「そうです」

「いなくなったことも？」

「はい...」

「どこに...」

「まだ、行方を捜しだせません。その者を信じたことが、責任書記の過ちでした」

「だから... 害毒行為だということですか？」

「意識的な害毒行為だと認定するには、まだ根拠が不十分です。しかし、事故の根本原因は強度が低いセメントで建設したところにあります。強度が高かったなら、それぐらいの地震では何ともなかったことです」

「事故がおこったコンクリートを分析してみましたか？」

「はい... 分析表をみると、平屋建ての住宅を建てうる程度の、強度の低いセメントでした」

「うむ... 施工には欠陥はなかったのかね？」

「すこし... ありました。しかし、根本原因はセメントの質にありました」

「しかし、責任書記はなぜ、人民の正当な声を押さえようとしたのですか？」

「ソントン郡の前責任書記だった道行政経済委員会副委員長トンムは、彼が不純異色分子を信頼した自分の過誤が広く知れわたると思って、押さえたと言いました」

「本人は何といったのかね？」

「認めませんでした。自分は党組織を通じて、当該機関で解明する前にむやみに憶測をして正確でもない噂を広めないようにしなさいと要求しただけだと言いました。押さえたと言えば、そう見ることもできますが、他の面から考えると、責任書記としてそのように要求したことは正しかったのではないのかという考えが出てきます」

キムジョンイル総書記はゆっくりとタバコを取り出した。

「クヨンセという行政経済委員会副委員長トンムは責任書記を擁護しました。他の幹部の意見はさまざまでした。懐が非常に広く人をたやすく信じるから過ちを犯した、階級路線を軽視して大衆路線を重視した、信頼するというのを誤ったのではないのか、信頼を悪用した奴が罪人ではないか、などというトンムもいます」

キムジョンイル総書記はタバコの煙を長く吹き出した。

「チャヨンジンが... ヨンジンが... 彼はなぜ信じたといったのかね？」

「チャヨンジントンムと何度も話をし、この問題についてよく聞かれました。彼は毎回、同じ返事をしました。現在のおこないが良く、忠実であろうとする人を信じないことができるだろうか。党活動家として... わたしは信じようとした。このように固執し、自己批判を誠実におこないませんでした。この問題にたいしては... わたしが不純異色分子を信頼したのは過ちではないのかというと、彼の正体が明らかになってから批判せよと言いました」

「そのように出たというのか？」

「気性が穏やかな道党責任書記同志も憤慨ふんがいて、上級党にたいする態度問題だと言って、活動停止を解かずひきつづき自己批判をさせよう、そのまま態度を変えないなら、組織問題と見なさざるを得ないと言いました」

キムジョンイル総書記は深刻な顔で室内を歩き回っていたが、席に戻り、続けるようにと柔らかく促した。リュスミョンは申し訳なさそうに低い声でつぶけた。

「重大な問題が発生し、その張本人がいなくなったのは現実であるにもかかわらず... まず、逃走と認めませんでした。根拠もなく...」

「そうなのか?!... 彼にたいして総体的にどんな印象を受けましたか？」

「山間の郡をもちたてようと、すべてを投じて仕事をしているのは事実です。しっかりした活動家です。しかし、おこなったことにたいしては一言も口にしませんでした。資格がないということだけ言って... 逃走であるのか否か解明される前には、評価を下すことができませんでした。彼が主観が強いことは事実です... 非

常に複雑な問題なので、道党責任書記同志も中間報告をして、指示を仰ぎたいと言っています」

「申訴者はどんな人なのかね？」

「リチャンギルという青年で、製紙工場の労働者です。少し分別がありません。リチャンギルトンムは、ソントンでは水が合わず暮らしていけない、他の場所に移住させてほしいと数年来ひきつづき要請してきたのを認められず、これに不満を抱いてきましたが、事故が起こり、世論が紛々としていることに衝撃を受けて申訴したようです。調べてみると、水が合わないというのは嘘です。都市に移住したいための口実でした」

「それなのに、どうして郡党責任書記に不満を持つのだね？ 責任書記が居住退去を担当しているのでもないのに...」

「新しい責任書記が来て、住民を居住地に固着させるように強く要求したためのようです」

「うむ...」

「リチャンギルトンムの姉は食料工場の支配人ですが、普通の活動家ではありません。その女性がどんな働きかけをしたのか、前責任書記のソングュテトンムが当該機関にリチャンギルトンムを移住させるように勧告しました。ところが、新任のチャヨンジン責任書記が来て、それを撤回してしまいました。その女性が今もソングュテトンムの家に時々たずねていくという噂があります。総括して道党責任書記トンムに意見を提起しました」

キムジョンイル総書記は、やるせない溜め息をついた。

「チャヨンジントンムは、だれが申訴したのか知っているのかね？」

「わたしが申訴者を教えようとしたのですが、チャヨンジントンムはそれを頑強に拒絶きよぜつし、教えることができませんでした」

...早くに、キムイルソン総合大学のある教授はキムジョンイル総書記の天才性について回顧して、キムジョンイル総書記は大学時代から一つのことをしながら二つや三つのことを構想し、4つや5つの問題を同時に思索したと述べた。オジンウ同志は、キムジョンイル総書記の非常な読書力に感嘆し、キムジョンイル総書記は文献や本を見るとき、対角線に読むのではなく、1度に3行、4行ずつ読む、まさにここに、キムジョンイル総書記の非常な読書力の秘訣がある、わたしはこれを近くで何度も感じ、わたしの目で直接見て、確認することができたと言った。

その日も、キムジョンイル総書記はリュスミョンと話しながら、同時に対外文化連絡委員会の提議書について思索していた。ソ連の各大学で同時に同窓会を開催するという通知があり、わが国のソ連留学生出身の活動家、科学者にも招請状を送ってきた。ソ連側の意図は明白である。社会主義諸国のソ連留学生出身の幹部を招請して、「ペレストロイカ」思想を注入しようというのである。

そのため、対外文化連絡委員会では、本人が同意するなら適当な理由で同窓会に参加しないようにしようと思うと提起してきた。しかし送ろう。送る方が良い。他人が「ペレストロイカ」思想を注入しようとしたとしても、われわれの知識人が受け入れるだろうか、スミョンの兄のような人は、ソ連に行って「ペレストロイカ」の実態を目撃することも必要だ。わが知識人を信じなくてはならない...

その夜、キムジョンイル総書記は計画通り、人民武力部長とともに打撃軍団に出かけた。

十5夜の月がこうこうと照らし、すべての大地が青白い光に包まれていた。キムジョンイル総書記と随員を乗せた乗用車の列は、西南方向に向かう道路にそって矢のように走った。

キムジョンイル総書記は打撃軍団の夜間戦術訓練を視察するために行く道ではあったが、ソントン郡党責任書記のことが心配でならなかった。

...人間が傲慢ごうまんになったのか。道党責任書記の言葉通り、党中央にたいする態度上の問題なのか...しかし、資格がないというのはどういうことなのか？ 資格... 資格がない... 資格が... 申訴が提起されるようなことをしたということなのか、そうでなければ、人を誤って信頼したことについて認め、出てきた言葉

なのか?... 今回のことを通して、彼の人間一般にたいする信頼が崩れたとしたら、それこそ単純な問題ではない。人々にたいする信頼に基づいて、民衆の力を信じ、革命と建設のすべての任務を展開していくわが党の一人の郡党責任書記がそのようになったとしたら?... 彼はまず、人々にたいする包容力、活動での展開力、進取性、大胆性、胆力... すべてを失うことになるだろう。党活動に愛と信頼の政治を徹底して具現できないだろう。

キムジョンイル総書記はそっと目を伏せた。以前に現地指導の途上で初めて彼に会って別れるとき、車の後をわれを忘れてついてきた彼の姿がありありと浮かんだ。胸がうずいた。

キムジョンイル総書記は人民武力部長とともに指定された界線に出て、打撃軍団の1個区分隊の夜間戦術訓練と実弾射撃を視察して帰る道で、郡所在地と農村の里の形成図案を見なくてはならないある一つの郡を実務指導した。そうして、ソントンにまっすぐに向かおうとしたが、途中で東の空がすでに薄明るくなってきた。打撃軍団であまりに遅れたようだった。朝に党中央委員会責任幹部の協議会をもつようにしておいたキムジョンイル総書記は、東の空を見ると焦った。キムジョンイル総書記は平壤方面に伸びる大道路とソントンへと別れて入っていく道の分岐点にいたると、車を止めて道におりたった。後ろに従っていた乗用車が次々に止まって、随行員たちが慌てて車からおり総書記の方に歩み寄った。そのなかにパクコンシクも入っていた。

キムジョンイル総書記は一方の手を腰に当てて、ソントンの方に曲がりくねって入り、夜明けの霧のなかに消えてしまっている道をながめた。ひっそりとうずまいているほの白い朝霧の海の向こうにソントンの地があり、そこに、山間僻地の困難な条件のもとで生活している数多くの人民がいるのである。彼らの所へいたる道... 何百年と、ソントンの人々は、死なずに生きぬこう、豊かに暮らそうと、このひっそりとした道を数知れず往来したことだろう。親子代々の人の足と自動車とトラクターの車輪に押し固められたこの道は、人々が落とした涙と汗、悲嘆と鬱憤、渴望と空想、熱い息にまみれて黒々としているようだった。ソントンの郡党責任書記... ふと黒光りする彼の顔が浮かんだ。

人民に豊かな生活をさせようと苦勞していたのに、その人民のなかから訴えられ、活動停止になった戦士... また来ると約束したまま一度もその約束を守れなかったが、早く訪ねて活動を了解し援助していたら、彼は過ちを犯すこともなかったのではないだろうか... 胸が痛んだ。

キムジョンイル総書記の後ろに来て立っている随行員のなかから、すでに何かを感じ、焦った顔で夜光時計を取り出して見る幹部もいた。

キムジョンイル総書記はふと後ろを振り返り、パクコンシクを探した。パクコンシクは慎重な態度で近づいてきた。彼は強い願いを込めてかろうじて言った。

「指導者同志、夜が明けます。このまま通り過ぎてください。わたしがあのトンムたちによく話します。そして、力のかぎり助けます」

「あの道を見ると、ヨンジントムんムんのことを心配で離れていくことができないではないか。行ってみなければならぬ」

キムジョンイル総書記は、朝に開催する予定の会議のため大半の随行員と人民武力部長1行には先に平壤に帰るように伝えて、車に乗った。そうして、薄明るい夜明けの空のもと、乗用車の列は車窓を光らせて首都へ向かって走り、3台の乗用車だけがソントンへの道に入ってしまった。

(つづく)